

転生したんでマジに家で引きこもる

ウェスタンブルー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

転生したんでマジに家で引きこもる

# 目次

はじまりの日↓世界征服のはじまり

1

転換日↓歴史の転換点



17



# はじまりの日↓世界征服のはじまり

転生した。生まれ変わった。

まー言葉は何でもいいけれど、おそらく異世界だろう場所に来た。転移ではなく転生。つまり赤ちゃんうだバブー。

異世界だろうと判断したのは至極簡単。魔力があつたからだ。黒青赤白。それぞれに地水火風の魔力は視界のそこかしこで踊っていて、たとえばキッチンなら赤が、たとえば氷室なら青と白がといった具合に集まっている。世界における元素は魔力と密接な関係にあるということだろう。

が。

どうやら俺はとことん魔力に嫌われているらしい。

黒青赤白の光の粒、その一切が俺に寄つてこない。寄つてこないどころか手を伸ばせば逃げる。どうやら大嫌いらしい。

ま使えないモンは使えないでオツケーだ。どうせ元々使えなかったのだから、

それより何故動けないのか。歩く走る立つ座るくらいはできたはずだけど。元からできてたことくらいはできていてほしい。

いや俺赤ちゃんだからできなくて当然じゃね？

ふむ、となれば……呼吸とかはできるんじゃないか。前もできてたことで、赤ちゃんでもできることだ。バブー。

しかしうまく声が出ない。というか両親 is どこ。こういうのつて目を開いたら知らない美男美女がいて、自分の名前を教えてもらえるものじゃあないのか。

呼吸は……できている。息苦しくないし。肺も拡張を繰り返している。気がする。

ただ声を出せないのは不便だな。おしめを替えてもらうことができないということだ。ばぶー。心の中でばぶばぶ言っただけと虚しいだけとようやく気付いた。

考えよう。

赤ちゃんな俺に、今の俺に何ができるのか。

座して待つ。

座してすらいないけど、これが正解だと思う。もし万が一無理な行動をしようとするば危ない。命が危ない。だって保護者がいないから。いや赤ちゃんだぞ。家の作り自体は結構上質なんだから、メイドくらいいるもんじゃないのか。

いなかった。

来ない。いやいるのかもしれないけど声出せないから呼べない。素晴らしい負のスパイラルだ。

しかし、暇である。

眠気は無い。さつきまで眠っていたからだろうか。

暇である。暇であるなら、そうだな、何か暇つぶしをするか。脳内エイトクイーンとかどうだ。無理だな。六個目で覚えられなくなる。じゃあ脳内じゃんけんとかどうだ。虚しいな。やめよやめよ。

魔力。

今ひとしお興味を引いているのはアレらだ。だけど寄ってこない。操れたりしないものか。いや操れはするんだろう。ああいうものがある時点でああいうものを操る文化が発展しているはずだ。術式詠唱とか魔法陣とか、何かしらで制御するんだろう。

声出せなかったら詠唱できなくね？ 終わったわ。詰んだ。どこの戦場に敵前でいそいそ魔法陣書く奴がいるんだ。なんで戦場出る前提なんだ。いやだよ戦いとか。血を見るのはそこまで抵抗ないけど臭いが無理なんだよな。フツーに吐くと思う。

えー？

……まあ待て待て。そうだよ。魔力が逃げるなら、魔力以外に干渉すればいいんじゃないか。

見えないけど大気にどうこうできるかもしんじゃないじゃん。できなかつた。

いや当然だよなこれも。前できなかったことがどうしてできるというのか。まず感覚がわからん。わからんから何もできん。何もできんから何もわからん。

「……」

そしてやつぱり声も出せん。

え、もしかして拷問？ 転生して赤ちゃんになって、けど何にもできないまま餓死させられるって拷問？ 効く効くソレめっちゃ効くわ。でも吐く情報が無いので解放してくれ。

じゃあ、まあ。

あとは——瞑想でもするかあ。

三年くらい経った。

体は動くようになった。けれど変わらず声は出ないし、家族もいない。そう家族がいなかった。

結構でかい屋敷なのに、家族がない。捨てられたか放棄されたか、そもそも人間から生まれていないか。

とにかく動けるようになった俺は、はいはいからよちよち歩きをして、今では普通に



歩いて立つて座って走って。

いや、うん。

邪魔い。

何がって、魔力が。

なんだろう、魔力には圧力のようなものがあるのだ。で、それが俺を圧している。走ろうとすれば魔力が一斉にどかなくちやいけなくて、けれど詰まるから、逆に俺が圧されて。ゆっくりゆっくり歩く、じゃないと移動が困難。ダルすぎる。

そんで外には出られなかった。

理由は同じ。魔力圧がヤバいのだ。どんくらいヤバいかっていうと、扉開けて外行こうとしたらぼよんって弾かれるくらいヤバい。最初は結界かなんかかと思っただけど、違う。俺は魔力に嫌われ過ぎていて、魔力で構成されているみたいな世界に適応できないのだ。

捨てられた理由はコレかもしれない。捨てられたっつーか連れて行けなかったっつーか。まあ何かしら家を出なきゃいけない事情があったとして、赤ちゃん連れてこうとしたら玄関で弾かれるとか想像してないわな。

つーことで、ヒッキーである。引きこもり。出られないんだからしゃーなし。

んじやまあ家の中で何ができるか、という話になる。

まず、どうやらこの身体、飲食が必要ない。ラッキー。まあありがちだよね転生者。多分病気にもならない。この三年間なっていないというだけだからならないかどうかはわからないけどなっていないから多分ならない。ラッキー。

ラッキーなヒッキーだ。

つまらないこと言っていないで、俺が今やっていることを話そう。

——実験、である。

いやね、魔力はどうにも触れない。扱えない。魔力圧に圧される。

けど、唯一俺が扱える魔力というものがあって、それが物質に宿ってる魔力だった。地水火風、黒青赤白。この世界のあらゆるもののほとんどはそれを有している。属性をね。

魔力単体に触れるのが無理でも、魔力の宿ったものに触れることはできたわけだ。長時間触れると魔力抜けちゃうんだけどね。脱水機か俺は。

ああ、で。

まあ魔力だ。魔力を間接的に扱えるとかわかってからは、実験実験アンド実験である。つまり、火属性のやつと風属性の混ぜたらファイアトルネードになるのか、みたいな。なんなかつたけど。

まず混ぜる、がダメだった。砕いて混ぜてる間に魔力逃げる。じゃあ煮沸、つて考え

たらお湯がまず水属性だったの。ちなみに水に長時間手を浸けていると蒸発する。高温なワケでもないのに。どういう原理なのか俺にはわからん。

んじやま、とりあえず扱いづらい赤と白こと火属性と風属性はポイして、今はずーつと青と黒、水属性と地属性で遊んでる。あ間違えた。実験してる。

水に土を入れて、混ぜて、どうなるか。

泥水になるんですねコレが。

知つとるわ。

「……」

ちなみに土は庭の、とかじゃやない。誰も整備してないのに美しい荘園のあるお庭だけど、俺が家から出られないので土はそこから取ってきたわけじゃない。

あるのだ。

植木鉢が。

……無尽蔵に土が出てくる植木鉢が。なんだそりやつてうんなんだこりやなんだよね。

特に植物の種とか入ってなくて、ただ土を取り出すと無限に出てくる。水も同じ。水が あつて、無限に水が出てくる。暖炉があつて、永遠に火が燃え続けている。密室にして暖炉燃やしまくっても酸素が無くなる気配はない。

思うにこの家時間が停まつてるんじゃないかなって。わかんないけどね。

まあ遊び場として十分だからそれでいい。ああいや遊んでるんじゃないなくて実験してるんだけど。

一応目標らしい目標はあつたりする。

というのも、玄関開けて見える世界。窓を開けて見える世界。

俺は押し出されちゃうからいけないんだけど、結構異世界なのだ。異世界の森って感じ。で、知らない色の魔力が結構ある。地水火風だけじゃないっぽいのである。

いやね、だから地水火風を混ぜたら別の魔力が元素ができるんじゃないかってそれだけなんだけどね。

とりあえず今全通り試し中。総当たりこそ実験の基礎。効率のいい実験がしたかったら机上に行け。最も適した環境で実験ができるぞ。

新しい魔力を作ってみただけで、何か物質を、という気力は無い。作ってどうすんだって感じだし。作れたこともない。というかまだ地水火風が混ざったことが一度もない。

成果／Zeroってまだ三歳児だからね。ばぶー。

「……」

これ詠唱とか必要だったら詰んでるんだけど。

五年くらい経った。

八歳児ともなれば流石に色々できる。背も伸びた。どうやら不老不死ではない様子。死んだことないからわからんけど不老じゃないのは確か。まあ成長期だし。20歳くらいで止まったりせんかな。都合良い不老不死のヤーツ。

で、実験ね。

まあまあ成功してる。必要なものは魔力だけじゃなかったのだ。

何か。そう、俺の血。

地属性の野菜切ってる時に指切っちゃって、それが混ざったらしい。地属性と水属性が血液を媒介に反応を起こし、なんかよくわからんボールになった。

弾力性のある、多分ゴムのな。某忍者漫画を思えば火属性が必要だと思ったんだけど、要らなかつたらしい。ボールは弾力はあるけどスパーボール程じゃないので、投げたらポテポテ転がってそのまま。取りに行くのも面倒なので放置してる。

これを参考に、他の属性も血液を媒介に総当たりしてみた。

結果。

「……」

何故か全部ボールになる。

なんなんだ。サッカー選手になれっていう啓示か？ だったら家をサッカーコートくらいの広さにしろ。

ちなみにボールとボールをくつつけても何も起きなかった。まずくつつかなかった。糊をくれ糊を。ボンドでもいいぞ。ちなみに土と水でセメント！ とか試してみたけど無理だった。ボールにはなっただけ。

でもまあ多分なんか原理はあるんだろう。躍起になることはない。まだ八歳児なんだから。

なおこのボール、放置しておくと同じ属性のもとに集まる性質があるっぽい。火風と火水がいつの間にかくつついていたり、水地と風地がくつついていたり。でも結局四属性しかないので、風地と地火と火水が連結している、なんてこともしばしば。特に互いを排斥しあうことはない。俺は排斥するくせにな。

そういうえば、俺から魔力が逃げる性質を利用して圧縮圧縮空気を圧縮ウ！ をやろうとしたことがあった。

いやね、手で密閉空間を作るのって難しいよね。逃げられまくるわ。魔力つて別に物理的なソレじゃないから、フツーに手の隙間から逃げられる。手を通り抜けたりはしないからやりようはありそうなんだけど、八歳児のちっちゃい手じゃ無理だ。もつとバス

ケツトボールを片手で掴めるくらいの大さきにならないと。

ボールボールボールアンドボール。

流石の俺も飽きてくる。

けどこれ以外やることないからなあ。暇の方が飽きている。天秤にかけたらこつちの方がまだ飽きていない。ので続けられる。

何か起きればモチベも変わるんだけどなあ。

十五歳になった。

正直本当に歳を取っているのか、そもそも俺が数えている暦はあっているのか全く分からないのでそろそろ年齢数えるのやめようかなとか思ってる。

思ってた時の事だった。

「……………」

ふと——もぞもぞと。

無数、と呼べるほどになったボール群の中で、動くものがあるのを感じたのだ。とうか見た。ボールの山が動いているのを。

すわゴキブリかと喜んだね俺は。喜ぶさ。他の生物この家にいないからな。ゴッ

キーの環境適応能力はこんなところまで発揮されるのかと。テラフォーマーズしてくれと。

が、違った。

「…………ふはあ！」

「…………」

ふはあ。

それはたとえば炭酸飲料を飲んだ時に出す音。あるいは長らく呼吸を止めていた時に出す音。

音だ。あ、いや、声か。

声。当然俺じゃない。

「よーやく意識レベルを言語の理解段階にまで上げられました！　ありがとうございます　ありがとうございます、創造主様！」

「…………」

あ、そういう。

俺そういう立ち位置ね。理解理解。

そこからは、そういうことの連続。



ボールを大量生産し、それがくつついてくつついてくつついてくつついて——喋るものになる。

これが生き物であるかどうかの判断は俺には付けられない。だから喋るもの扱いだ。こいつらに雌雄があるのかもわからないから娘なのか息子なのかも不明。ただボールを重ねるごとに、世代を重ねるごとに、どんどん人間っぽくはなっていっているような気もしなくもない。

最初の奴はなんか球体関節っぽかったんだけど、最近のはそれも消えていて。

ただただ俺の作るボールをいろんな形に組み替えて、それで同族を増やしている。同族？ 属性違うけど。まあいいか。

「創造主様」

「……？」

「お願いがあります」

こいつらは俺が喋れないことを知らない。いや知ってるのかもしれないけど、それがないことであるかのように接してくる。俺からできることと言えば、首を傾げたり頷いたりするくらいだ。

「創造主様も知つての通り、この屋敷内にある元素には限りがあります」

「……」

「けれど私たちはもつと多様に増えたいのです。ですから、私たちに外出許可をくださいー!」

「……?」

「私たちが外で様々な元素を獲得してきますので、創造主様には——」

「……」

あーはいはい。

そういうことね。俺はお前らの製造機なのね。お父様と言いながら完全な機械扱いなものね。

了解了解。

頷く。

「ありがとうございます!」

ところで君達、外に出られるんか?

俺みたいに弾かれて——。

あ、普通に出て行った。

それから、あれほど欲していた見たことのない元素群がそれはもう沢山手に入った。俺が魔力と呼んでいたこれは元素と呼んだ方が良さそう。こいつらがそう呼んで

いたから。でも声に出すわけじゃないんだからまあ魔力でいいだろう。

で、俺は血液を媒介にボールを作りまくる。作りまくったボールはこいつらが組み立てて喋る者にして。

そいつらが出て行って……の繰り返し繰り返し。

お父様お父様と慕ってきているような素振りを見せているけれど、製造機としての役割をやめたりしたら……牙を剥いてくるんだらうか。

まあ、そんな時はそんな時だな。そろそろ飽きてるし、死んでもいい。

「創造主様！」

「……？」

「創造主様のおかげで、私たちの国ができました！　ありがとうございます！」

「……」

へえ。

……え、いやそれやばくね？　新たな生物が新たな国作っちゃったってこと？　既存の生物にめつちや迷惑かけてんじゃない。うわー、父親として責任感じるわ。

謝る気はないけどね。知らんし。娘とか息子のやったことを父親が謝らなきゃならないっていうんなら、まず俺の両親呼んで来い。

しかし。

少しばかり残念だな。国かあ。文明か。

異世界ファンタジーな国、見てみたかったなあ。

「……創造主様」

「……？」

「わかりました！ 私たちの国を創造主様に見せられるよう——この世界を征服し、お屋敷の窓からでも国が見られるようにします!!」

え。

「待っていてください——必ずや成し遂げてみせます！ あ、でも仲間が元素を持ってくるのは止まらないので、そっちはそっちでお願いします！」

「……」

あ、うん。

え……。

色々驚いてるけど、もしかして君。

俺の考え読めたりする？

「では行ってまいります！」

そういうわけではないのか……？

## 転換日↓歴史の転換点

何年経ったかはもう覚えていないけれど、ある日突然人が来た。

人。人間だ。ちよつとばかり耳の長い人間。喋るもの達に連れられて——あるいは連行されて、ソイツはやってきた。

「……創造主の屋敷。本当にあったとは……あでつ!？」

「創造主様の御前です。口を慎みなさい、ワディナ」

年の頃はまだ15、6なのだろう、生意気な感じの抜けきっていない……こう、子供！　って感じの人間。

ただ、喋るものが元素魔力以外を連れてくることなんてほぼなかったから、興味本位でキッチンを出た。

階段。階段上から、階段下の人間を見下ろす。

「創造主様、申し訳ございません。許可もとらず、この神聖なる屋敷に他生物を上げるなど……」

あ、他生物の自覚はあるんだ。

もうボール生物こと喋るものはみーんな人間と同じ形になっているから、なんなら自

分を人間だと思っている奴も多いんじゃないかと思つてたけど、そういうわけじゃないのね。

とりあえず首を振る。別に許可なんていらぬし。

アレだろ？ 友達連れてきたとかだろ？ 別に俺お前らの親だと自称しているわけでもなければ、その付き合いに口出しすることもないから好きにしてくれよ。キツチン荒らしたら怒るけどな。

「——ッ！」

「創造主様、どうか、どうかお怒りを鎮めてください……！」

「……」

え、俺怒つてた？

来るかもわからん想像で怒るとかヤバ過ぎんか俺。感情の制御ちゃんとしないと。

……で、何用？

「ち、チチル。創造主何も言わないけど、つでえ!？」

「お願いだから黙つて。これは前例がないことなの。創造主様の機嫌を損なえば——私  
たちは、あなたを消すしかなくなる」

「……」

「う」

「創造<sup>おと</sup>主<sup>と</sup>様。まずはご覧になっていただきたいものがあります」  
「……………」

へえ、お前チチルっていうんだ。青緑色ね。……そんなんいつぱいいいるからなあ。  
いつそカラーコードで覚えるか？

で何。見せたいものって。

「ワディナ。手の上にアレを出して」

「……簡単に言ってくれるよな。アタシらはお前たちと違って無詠唱じゃ時間がかかん  
だけど……………」

「じゃあ詠唱してもいいから、早く」

「わ、わーったよ。——じゃあ、行くぞ」

詠唱？ 無詠唱？

え、なに？ 魔法でも使うつもり？ え、マジで？ やつと？

異世界に来て結構、マジでマジにそれなりの時間経ってるけど、ここへ来てやつと魔法か。うわちよつと楽しみなんだけど。

「原初より出ずる四、理より外れし三、なれば問おう、汝は何ぞや。彼方より来たりし聖  
光の灯よ！」

おー。詠唱っぽさあるー。

で……その結果が、コレか。

ワディナの左手。上向きに大きく開かれたそこに現れたのは、輝く魔力。

黒青赤白——地水火風のソレではない。外界に存在する無数の魔力とも違う。魔力を含むことで物質が輝く事例は何度か見たことがあるけれど、魔力自体が輝いているのは——そしてそこに色がないのは。

初めてだ。

コツ、コツと。

自然と身体は階段を下りて、ワディナの目の前にまで来ていた。なんでか蒼褪めた表情のワディナを余所に、その手にある魔力を観察する。

輝き。そう表現する他ないソレは、やはり色が無い。無色透明のボールが光っている、みたくないな。ふむ、面白いな。中々面白い。

そう思つて手を伸ばすと——。

「う、うわ!」

バチン、と弾かれたように、ワディナが仰け反る。その背を支えるチチル。

……うーん。これも触れないのか。というかワディナごと圧されるとは思つてなかった。悪いことしたな。

「な……なんだよ今の！ 魔法が押し返された……？ どういう、むぐつ」



「創造主様——いかががでしょうか。お気に召されましたか？」  
頷く。

研究のし甲斐はある。そうだ、そもそもこの喋るもの達は、自身らのバリエーションを増やすために様々なもの……魔力を含んだものを外界から持ってきていた。

それが俺の実験・研究という目的と一致していたから製造機をやっているわけで、だから逆もありなんだろう。

いつもお世話になってる俺に珍しいものを持ってきて、副産物として新たな仲間を得る。……ホントに逆か？ 良いように利用されてね？

まあ利用されててもいいんだけど。

「お気に召すつて、なんだよ……」

「喜びなさい、ワディナ。あなたは言語を解する生物として初めて、創造主様に見初められました。以後、創造主様の創造に協力を惜しまぬように」

「え、いや、なんだよそれ。アタシのこの症状を治してくれるからって——」  
「眠れ」  
Blackout

ガクン、と崩れ落ちるワディナ。

「おいおい、あんまり乱暴するなよ。お前らが外で何してるかは知らないけどさ、争いごととは良くないぜ？」

……というのはそれとして。

その手から魔法が消えても……輝かん魔力がワディナの全身にあるのはもう見えている。確かにこれは、良い研究材料だ。

持ち上げようとする。が、その前にチチルがワディナの身体を持ち上げた。おー、力持ちだね。

「実験室に運んでおきます。……その、創造主様」

「……？」

「私たちは本能に刻まれた意識として、こうして創造主様に新たな元素を運んできけます。ですが……その、もし、できるのなら……ワディナを殺さな、」

「余計なこととは言わないように」

突然だった。

本当に突然、どこぞより現れた喋るもの達が、チチルを取り押さえる。どこぞよりつて言ったけどまあどこにいたのかはわかってる。家中にいたんだ。待機中だったり、家の掃除をしていたりした個体が一瞬で集まってきただけ。

ワディナは別個体が抱えて実験室……他の魔力を含む物質が安置されている部屋に連れていかれる。

そしてチチルは。

「申し訳おとぎいません、創造と主様。この個体は余計な感情を覚えてしまったようなので、廃棄処分といたします。お見苦しい姿を見せ、重ねて申し訳おとぎいませんでした」

え、廃棄処分？

……いややめてくんない？ 一応それも俺が作った成果物だぞ。勝手に死ぬとか勝手に壊すとか、なんで許されると思つてんの？

「創造おと主様？ な、何故お怒りに……」

「……」

「い、いえ。わかりました。チチルの破棄はいたしません！ 申し訳おとぎいません、申し訳おとぎいません！ だから怒らないでください……創造おと主様の感情が荒ぶると、私たちは！」

何が起こるといふのか。

周囲を見れば。

……なんかみんな、廊下の手すりとか、階段の縁とかに強く掴まって……まるで強風で吹き飛ばされないようにしている、みたいな。

え、俺つてそんなん出してるの？

あー。それともあれか。俺が怒ると、魔力が余計に俺のこと嫌うから、どんどん逃げつて……んでこいつらも魔力でできてるから、はあはあ、なるほどなるほど。

つーか俺も俺だよ。

なんか長年人とマトモな話してないせいで怒りやすくなってるな。  
びーくーる。

んで、取り押さえられるていたチチルの頭に手を置く。

「創造主様……う？」

まー、なんだ。

なんかお前らなりのルールにおける禁忌を犯したのかもしれないけど、俺から見たらお前から兄弟姉妹なわけよ。雌雄わかんねーけどさ。

だから仲良くしてほしいわけだ。廃棄するとかさ、ナシナシ。な？

……つて言いたい。なんで声で無いんですかね俺は。

「わ……わかりました。チチルの処分は創造主様にお任せいたします。それでは、これにて失礼を」

某忍者漫画ばりに散ツ！ と散っていく喋るもの達。

処分は任せる、つて。

……うーん。まあ適当に実験見せておけばいいのかな？

あとチチルが取り押さえられる前に言いかけたこと、別に聞き逃してないよ。殺さないで、だろ？

人を何だと思ってるんだコイツラ。確かに今まで持つてきていた魔力を含む物質は切り刻んだりなんだりしてたよ。鼠とか虫とかもね。

でも流石に人間はやんねーって。その辺の良識はあるって俺。

ということ、レツツクツキング……ならぬ実験開始である。

チチルがワディナに使った魔法らしき何かの効果は非常に強力なようで、一時間くらい経った今でもワディナは目を覚ましていない。チチルには「そこにいろ」という視線を向けて置いたら、本当にそこで微動だにしなくなつた。

お前ら俺の言葉わかってんのかわかってないのかはつきりしてくんね？

まあいい。

えー、で。クツキング、というのもあながち間違いない。

というのも、外界から持ち込まれた魔力を含む物質というのは純度に難があるのだ。たとえば赤……火属性を含む鉱石だというのに、周囲にくつついた地属性たる土のせいでそのままでは使えない、とか。逆に殻の水風属性だけ欲しいのに、中身が火地属性を持つている、とか。その他、他の属性魔力が雑に含まれている場合も多々ある。

今回のワディナもそうだった。

まず服。物凄い地属性だ。だから脱がせた。

……いや、まあ女の子だってのはわかってたし、良識あるって言った手前色々言われそうなのはわかってるんだけど、邪魔なもんは邪魔で。どうせ雌雄の分からない喋るもの達しかいないし、俺も……なんつーか、身体は人間とは微妙に違う感じだから、いっかなって。

で。で。

とりあえずその体を洗っていく。いやホントに地属性は厄介で、土が少しでもついていたら大体地属性が混じる。火水を作りたいのに土がちよつとだけ残っていて火水土になつて結果が変わる、とかあるあるだ。色が黒なのも厄介。見づらいなだね、ちっちゃい黒つて。輪郭かと思う。

だから念入りに洗っていく。水属性はね、別にいいの。乾かせば簡単に消えるから。染み込むこともないし、どんだけ厄介でも永遠に燃える暖炉の前とかに干しておけば絶対に消えてくれるから楽。

……ま、裏技として、俺がずっと持つてる、つてのもあるんだけど。

俺の手に収まる程度の大きさの魔力物質であるなら、俺がずーつと持つてりや勝手に逃げていくから楽だ。脱水脱水。

流石に人間大のやつのはできないから、念入りに念入りに洗っていく。

「……」

しかし起きんな。いや眠ったままの方が楽でいいとはいえ、こんだけ体をぐいぐいーと伸ばされたりしてて、よく起きないもんだ。そんだけ魔法が凄いのかね。

おーし。

まあ、こんくらいでいいだろう。

次。

彼女の身体の中にある輝く魔力を抽出する作業だ。

普通の物質であれば切り刻めばいいんだけど、ワディナにそんなことしたら多分死ぬので無し。それに、珍しい魔力なんだからそう簡単に手放すわけもないっていうか。これが簡単に手に入る……それこそ家の中の植木鉢とか水桶みたいな手軽さで手に入るものだったら切り刻むのもアリだったけど、ワディナのような魔力の事例は今回初めて見たもの。

貴重な実験材料を一回で使い切る馬鹿がどこにいますかって話。

半透明な……プラスチック、じゃないんだけど、まあ赤青黒飴黄緑……っていう魔力構成で作られている容器だ。あ、俺が作ったんじゃないよ。喋るもの達が昔持ってきてくれたもの。盗品でないことを祈る。





「……………」

「あ、いえ、申し訳ございません」

思わず、といった様子で言葉を漏らすチチル。

今はとりあえずということまで青赤だけだけど、今後は色々な魔力と組み合わせてみたい。だからできればウチに泊っていつてくれると助かるんだけどなー。

……あ、ダメだ。俺が飯食わねえからウチじゃ飯が出せん。異世界とはいえ、さすがに人間腹減り過ぎたら死ぬ、よな？

「……………」

うん、おっけー。

最後の一つをぐい、と押し出して、今回の作業は終わり。

ワディナを湯舟から取り出して……チチルに押し付ける。

「え、あ」

「……………」

「よ………良いのですか？ その、ワディナの命を使わなくて……」

「……………」

「いえ——ありがとうございます！ 創造主様！」

できれば今後も何度も持ってきてほしいな、という思いを込めつつ。

でもこれ以上奪うと多分死ぬんだよね。いやさ魔力つて結構命と密接っぼくてさ。昔黄色を強く持つ鼠が持ち込まれたことがあって、試しに一気に全部の魔力を抜いてみたら、石化したんだよ。石化。地属性じゃない、何の魔力も持っていない石になっちゃってさ。

以降教訓として、今後も使いたい素材に対しては腹八分目くらいで抑えるようにしている。

もう行つていいよ、という感じにチチルを促す。

するとチチルは深く深く頭を下げて、ワディナと、ワディナの服一式を持つてものすごい速度で実験室を出て行つた。

……ま、ここ臭いからね。俺はもう慣れたけど。

生涯の森。

遙か昔からそう呼ばれるこの森には、妖精という種族が住んでいる。

エルフでもドワーフでもオークでもマリーンでも……既存のどの種族でもない妖精は、それはもう強い。力も、生命力も、意思も言葉も、増殖力も。

歴史書の記述には「突然現れた」と記されているにもかかわらず、その次のページでは「国を築いた」とされていて、その下の段では「いくつもの国を滅ぼした」となっている。

今では妖精の作り上げた国と、その支配下におかれた国が大陸中を占めている——必死の抵抗をしている国は少しはある——のだから、その異常さがわかるだろう。

妖精の出所が生涯の森だということはわかっているのに、どうして誰もその森へ向かわなかったのか。

当然、そこを守る妖精が強すぎるからだ。

無理矢理入ろうとしたものは死んだ。空や地中を行こうとしたものも死んだ。

妖精に取り入って仲良くなったものでも、生涯の森という単語を出した瞬間に愛想を尽かされたか、その場で殺された。

それほど妖精たちにとって生涯の森は大事な場所なのだとわかる。

また、幾つかの聞き取り……妖精らが零した発言から読み取れば、生涯の森には創造主なる存在がいるという。大きな屋敷に住まうその存在は、明確な容姿風貌の記録が残されていない。ただ妖精を作り続ける存在であり、そして妖精を多種多様にしたのも、妖精に世界を制圧するように命令したのもその創造主だという。

妖精に屈していない国では創造主なる存在を悪鬼の如く書く歴史家もいるし、反対に

妖精のおかげで繁栄を得た国では神のように崇め奉る教会があったりもする。

得てして”創造主”は幻、おとぎ話に似たものであり、目下世界の脅威となるのは妖精であるのだが――。

「……なあ、チチル」

「なに」

「アタシ……治った、んだよね？」

「抑えられた、が正しいと思う。完全な治癒は創造主様でも難しいのか、やらないのかはわからないけど……アンタの中にあつた聖なる魔力は確実に収まつてる。これからは多分、今までより簡単に魔法を使えるだろうし、肌の内側が焼ける痛みとか、内臓が引き裂かれる思いとか……そういうのはしなくて済む、と……思う」

「煮え切らないなあ」

「しやうがないじゃない。初めてのことなんだし。……もしかた酷くなつたら、連れて行ってあげるから」

自身を担いで走る”妖精”ことチチルに、ワディナは溜息を吐いた。

歴史家なんてアテにならない。噂なんてアテにならない。

ワディナの生まれた村は、妖精の支配下にある小国にあつた。織物の生産量に長ける国で、それら糸や布の原材料を作る村。

本当になんでもない、どこでもない……平々凡々なその村で、ワディナは生まれた。生まれ、目覚めた。

聖なる魔力。

天使なる幻想の種族が持つと言われるその魔力は、エルフやドワーフといった人間たち……歴史書においては”違族”とされる者達を焼き焦がした。誰も扱えないし、誰も触れられない。どの元素にも属さぬ故に地上に現れることは無いけれど、だからこそ誰も対処法を知らない。

それが聖なる魔力。

そして、ワディナに宿った魔力だった。

ワディナはエルフだ。純粋なエルフ。混血でもなく、先祖返りもしていない。ただのエルフ。

けれど宿ったのは聖なる魔力だった。

——だから、母親を焼いたし、ワディナ自身も焼いた。否、赤子の時は感情の制御ができてなくて、村一つを焼き尽くした。

焼き尽くしかけた。

偶然である。偶然だったのだ。

ちようど、何の目的もなくふらふら飛んでいた”妖精”がその様子を目にしたのは。

「アレから十六年かあ。長いようで短いようで……長かったなあ」

「赤子の時の事覚えてるの？」

「まさか。そんな奴いたら化け物だって」

「……私はアンタのそういうところわかってるからいいけど、他の”妖精”の前ではソレ絶対言わないようにね」

「え？　なんで」

「私もまだ生まれてない頃の話だから真偽は定かじやないけど、創造主様がそ<sup>お</sup>うだったらしいの。生まれた瞬間から意識があつて、赤子の頃から魔力を編<sup>と</sup>んでいた、って」

「……創造主、か」

チチル。

彼女は人間とは比べ物にならない魔力でその魔力を抑え込んだ。それでも焼け焦げた村の人間は手遅れだったし、泣きわめく赤子のあやし方なんてチチルは知らない。

聖なる魔力は”妖精”の身体を焼きはしなかったから、チチルは廃棄された妖精の身体を用いて封印を作成。以降、ワデイナの聖なる魔力は抑えられるようになる。

——ただし、それは外に放出されなくなったというだけの話。

内部で暴れ狂う聖なる魔力はワデイナの身を焼き焦がし、ほかの元素を掻き乱し、ワデイナから「普通」というものを奪っていた。

「本当に大丈夫、なのよね。痛みとか、ない？」

「あー、うん。ホントにない。正直チチルに眠らされた時は死ぬんだろうな、とか思ってたけど……アタシ、今、生きてんだな」

「それについては、ごめんなさい。そういう名目でしか外界から屋敷へ何かを持ち込む、ということとはできないのよ。創造主様は決して医者おとこの類ではないから」

「成程なあ」

それでも十六年。

チチルはワディナに寄り添い、その痛みを消す術や緩和する方法を探し、案じ、彼女の成長を見守ってきた。聖なる魔力を抑えながら魔法を使う術や、聖なる魔力をどうにか鎮める術など色々講じて、けれどダメで、それでも、それでもと。

だから、最後の手段だった。

自分たち妖精の禁忌——創造主様おとこに頼る、というのは。

妖精にとって創造主様は神に等しい。否、神なんかよりも上の存在だ。

自分たちを作るもの。自分たちを生み出してくれるもの。言葉を話すことのない創造主様は、けれど感情豊かで、とても素直だ。

だから、嫌なことがあるば——嫌だと感じれば。

あと少し、何か違ったら、チチルもワディナもこの世にいなかっただろう。

それはあるいは、創造主<sup>おとこ</sup>様の手ではなく、他の妖精の手によって、かもしれないけれど。

「しっかし、アタシは眠ってる間何をされたんだ？ それがわかればアタシも創造主を頼らずに自分で鎮める、みてーなことができるってのにさ」

「……理解の及びつかないことよ。あなたは触られただけ。それだけで聖なる魔力はあなたの身体から逃げ出した」

「うわ、ホントに理解できねえ。……ちえ、アタシ一人でできるようになれば、チチルにこれ以上迷惑かけずに済むとか思ってたんだけど……これからも頼りっぱなしになりそうだわ！」

「今更でしょ。あなたが赤ちゃんの頃から面倒見てるんだから、今更どうってことないわ」

生涯の森。創造主。妖精。

ワディナは思う。世の中、不思議な事ばかりだなあ、と。  
だから。

「……なあ、チチル」

「なに」

「アタシ、やっぱり学園行って魔法習うのやめるわ」



「……別にいいけど、じゃあ何になるの？ 無職は許さないけど」

「冒険者になる。で、世界の秘密を解き明かす！」

「聖なる魔力は？ 完全に除去できなければ、多分定期的に創造主様おとを頼ることになるけど」

「定期的に帰ってくる！ ……つか、チチル。お前も一緒に行くんだよ！」

ワディナは思う。

本当に歴史書なんてアテにならない。だって、こんなにも親身になってくれる妖精が存在していて、創造主つても語られているものと全く違った。

——なら、アタシがちゃんとした歴史書を書いてやる！

「冒険者で、歴史家ね……ま、いいんじゃない？ 私たちのことをそこまで深掘りする人間って今までいなかったし、悪印象ばかりで嫌になる、とか言ってた子もいたし……印象改善つてことで協力してくれる妖精も少なくはないでしょう」

「おお、珍しく肯定意見！ んじゃ——チチル、生涯の森に戻るぞ！ まずはあそこから——ぐえっ」

「馬鹿言わないで。聖なる魔力の治療目的以外で行ったら、本当に殺されるわ。生涯の森以外の全て、にしなさい」

「……いいや！ アタシは諦めないね！」

それは。

それは、それは——ある冒険家が遺す日誌。既存の歴史書に激震を与える、一部では法螺話とさえ囁かれる冒険譚。

妖精チチルと冒険者ワディナの織り成す波瀾万丈な物語——になる、予定。

「いつかホントに死ぬわよアンタ……」

「ハハッ、そりや当たり前だろ、チチル！」

「お生憎様、私たちは破棄以外じゃ死なないのよ」

「じゃあアンタが見届けてよ、アタシの生涯を」

「……ええ」

引き籠りのすぐそばで繰り広げられた、小さな小さな友情の物語。